

中東と極東の作家たちの出会い：

マフムード・ダルウィーシュが忘れられなかった広島

小 泉 純 一

Abstract

This paper will show how Mahmoud Darwish was introduced in Japan and visited Hiroshima. He was not only the greatest poet of the 20th century but also an activist to fight for the right of Palestine. We should not forget that he once visited Japan. After he was awarded the Lotus Prize for Literature in 1970 some Japanese writers such as Yoshie Hotta got interested in Middle East literature including the works by Darwish and planed to invite some writers and poets from Middle East countries to Japan to have a conference. In 1974 the conferences were held in Tokyo, Osaka and Fukuoka. The members from Middle East included Darwish, Adonis and so one. Because of a political trouble the writers from Egypt refused to attend it on the first day. But Darwish attended all the meetings and also visited the monument and the museum of Hiroshima on the way to Fukuoka. When he suffered from the air raids by Israel at Lebanon in 1982 he began to write a prose poem called *Memory for Forgetfulness*. He wrote about Hiroshima in it. The visit gave him the chance to connect Hiroshima and the atomic bomb to Lebanon and the air raids. His words were quoted in a local newspaper that “The Problem of Hiroshima has been stuck in a heart of all the people on the earth. People in Hiroshima has suffered from the cruelty but we should say it is up to all human beings.” I want to say it’s not a coincidence that the poem started at August 6th which is the memorial day of Hiroshima. Just after he became a member of PLO and a speechwriter for Yasser Arafat there was no article on him in the papers in Japan until his death. We should not forget his visit to Hiroshima gave him an inspiration to his poetry.

キーワード：マフムード・ダルウィーシュ，広島，アジア・アフリカ作家会議，*Memory for Forgetfulness*

童謡の「月の砂漠」や『アラビアンナイト』がアラブ世界を象徴できた時代を今となっては懐かしく思う。日本人観光客が中東の砂漠を訪れ、観光用のラクダに乗ると、ラクダ使いはこの歌を歌ってくれたそうだ。その後、石油がもたらした富というイメージが加わり、七十年代のオイルショックが起きて、石油に依存しすぎることの危機感も加算されてきた。とりわけ、中東に対する思考停止状態をもたらしたのは、パレスチナの解放を求める一部勢力が引き起こしたテロ行為であり、日本赤軍による飛行機のハイジャック事件やテルアビブ空港などでの銃乱射事件なども関係してくる。そして、二十一世紀に入ってからすぐにニューヨークで起きた9.11の多発テロ攻撃は、中東の武装勢力に対する恐怖をかき立ててきている。しかし、世情や政治を中心とした世界を離れれば、今も昔も日本と中東の相互理解を図ろうとしてきた先人もいるし、二つの国の血を引く者も生まれてきている。異国への偏見を増幅するのではなく、相手のことを正しく知ることにより、彼らが何を考え、求めているのか、自分たちが何をすべきなのか考えることが、異文化を理解しようとする上で健全な態度であることは言うまでもない。忘れられてはいるのだが、中東の文化に関心を持ち、正しく理解しようとした歴史を我々は持っている。

私がパレスチナ系アメリカ人の作家に関心を持つようになったのは、湾岸戦争が起きる直前にアメリカの作家たちが反戦のサイトを立ち上げ、その中にパレスチナ系アメリカ人の女の詩人、ネオミ・シーハブ・ナイ (Naomi Shihab Nye (1953-)) の名前をみつけてからだ。その後彼女が十代の頃一年間パレスチナの地で過ごした経験を元に書かれた小説 *Habibi* を翻訳し、パレスチナ問題をテーマにする上で、作家としての感性や力量に感銘を受けた。しかし、そんな彼女の思いをいっそう強く感じたのは、9.11が起きた一週間後に彼女がネット上に発表した公開書簡、「自称テロリストへの手紙」だった。ネオミの父は1948年にイスラエルがパレスチナに侵攻した際、アメリカに移住、そこで出会ったアメリカ人女性と結婚し、ネオミを授かった。ナイは一年間のパレスチナ生活の後、短期間パレスチナを訪れる以外はアメリカで活動し、詩人としての知名度が高まりつつあった時期に9.11は起きている。その手紙で彼女は、パレスチナの血を引き継ぎ、アメリカに住むハーフのアメリカ人として、テロリストたちに、問題を解決する平和的な道があることを論じている。同時に、そんなパレスチナ人もいることを世界の人々に示している。この時期の彼女の作品を読むたびに、作品の背景にそんな状況へのやり切れない思いがあることを推測し、これから年月が過ぎた時、同じ作品を読む未来の読者には、そんな切なさは伝わりにくとも考えた。文学作品は、時を越えた普遍的な意味も持つが、特定の時代にしか理解できないような意味もあることを実感させられていた。それが忘れられるのは仕方が無いとも思えるが、それを書き残すのも文学に関わる者として一つの責任の果たし方でもある。これまでに中東の文学を紹介してきた先輩諸氏も同じ思いを抱いたに違いない。

二十世紀のパレスチナ問題がどのように日本に紹介されてきたのかをまとめる際、パレスチナを代表する学者エドワード・サイード (Edward Said (1935-2003)) がどのように紹介されてきたのが鍵となることは予測できた。しかしそれに先立ってパレスチナを代表する詩人の、マフムード・ダルウィーシュ (Mafmoud Darwish (1941-2008)) が七十年代に紹介されていたのは

驚きだった。八十年代に入り、ダルウィーシュと入れ替わるようにサイドへの言及が増えると同時にダルウィーシュに関する情報は、ほぼ皆無となった。しかし2008年に彼がアメリカの病院で亡くなった際、国内外でその死は大きく報道され、詩人として国際的な評価を得ていたことが実証された。パレスチナを代表し、そこに住み死を迎えたこの文化人に対して、いわゆる国葬がパレスチナの自治政府の置かれているラーマッラーで執り行われ、アッバス議長が弔辞を読む姿をテレビの画面から見ることができた。また、ダルウィーシュは日本を訪問し、広島にも足を運び、原爆の体験をその後自分がレバノンで受けた絨毯爆撃と重ね合わせ、作品化していることを知る者は少ないだろう。この作品は *Memory for Forgetfulness* 『忘れやすさのための記憶』と名付けられているのだが、この作品にとどまらず、日本とダルウィーシュとのつながりも忘れられるべきではないし、多くの日本人の胸に彼が広島を訪れたときの思いが忘却されないことを願う。

七十年代からサイドとダルウィーシュがどのように日本に紹介されてきたのか、誰がどのように紹介してきたのかを跡づけることは、これからの中東と日本の関係に関心を持つ者にはいくらかの手がかりになるだろう。それにつけてもこれを書いている時代と七十年代との大きな違いの一つは、若者の政治的・社会的意識の違いなのだ。七十年の若者は大きく見れば、反体制的な意識を持つ者と政治に無関心な層に分かれていた。なかには自民党政権寄りの現実的で保守的な立場をとる若者もごく少数いたであろう。反体制的な意識を持つ若者にとっては、左翼的な立場に立つことが当然であった。左とか右と言う政治に関する価値観が支持を失ったこと、時代の閉塞感がナショナリズムや保守的な意識を助長していること、七十年代とは異なる論理や価値観に若者が新たな足場を築こうとしていると私は思いたい。これから書き記す七十年代においては左翼的な価値観が特に文化人やジャーナリスト、学者の間で尊ばれていたことを忘れないでほしい。この時代の若者の意識も数十年のうちには変化するものであり、これから五十年後どのような世界を迎え、その時の若者がどのような意識を持つか予測はできない。私が考えてほしいことは、自分の信念や信じるもののために、中東の作家や文化人の思いを伝えようとした先達が存在したことであり、その責任をわれわれはみんな引き継いでいる、ということなのだ。

日本の一般的な読者にサイドとダルウィーシュのどちらを知っているか尋ねれば、圧倒的にサイドの方が知名度は高いと思われる。両者の著作の中で日本語に翻訳されているものを比べればその差は歴然としている。しかし、具体的に作品とその人となりで紹介されたのはダルウィーシュの方が十年ほど早かった。ダルウィーシュは七十年代の反体制的なムードの中で、その一つの象徴として紹介されていた。その後、反体制的なムードの停滞が生じ、サイドは政治的現象というよりは、文化的ムードの中でこの国の知識人たちの間から支持を得るようになった。もちろん、サイドの存在そのものにもパレスチナに関わる政治やパワーポリティックスの問題は関係していたのだが、学問的にポストコロニアリズムの大黒柱として受け入れられた分、政治的な要素は希釈化されたとも言える。ここらあたりに、七十年代から八十年代へと、日本における政治意識のあり方が変化してきたことが背景にあることは言うまでもない。

二十一世紀に限ってみると、日本と英語圏でのダルウィーシュの紹介を比べてみると、英語圏の方が遙かにすすんでいる。元々アラビア語で執筆された彼の著作の多くは英語に翻訳され、研究書も出版されているし、雑誌にも研究論文が発表されてきている。アメリカにはパレスチナ系アメリカ人も存在し、パレスチナ系やアラブ系アメリカ人作家への認知が進んでいることが背景にはあるだろう。一方日本を見ると、2006年に四方田犬彦により長編詩“Mural”を含め中期の詩作品を翻訳した『壁に描く』が出ているのみ。雑誌も含めると『前夜 Zen-ya 2006 冬』に実村文が「彼は自分を殺しにきた男を抱きしめる」を翻訳し解説している。また、同じ年の『現代思想』五月号には、ハマスがパレスチナ議会選挙で第一党となったことへの意見をダルウィーシュに求めたインタビューを新井令子が翻訳している。その他、アラブ文学研究者の岡真理や政治学者の早尾貴紀らがその著作でダルウィーシュに言及している。ダルウィーシュの残した著作に関して日本語で書かれた文献は限られており、その点に限ってみても、ダルウィーシュの紹介や研究は遅れている。しかし、七十年代・八十年代はそうでもなかった。

その痕跡を示しているのが、彼の死後2009年に雑誌『詩人会議』の二月号に掲載された「追悼ダルウィーシュ」がある。これはヨルダンのアンマンに住む作家セレーヌ・フレイラが雑誌*This Week in Palestine*に発表した「最高のダイスプレイヤー」と、アマル・ナシャビーの「さよなら マフムード」を小林ひろこが翻訳したもの。最後のページに編集部から「マフムード・ダルウィーシュ詩抄にそえて」という一文が付け加えてある。冒頭は次のように始まっている。

本誌では78年4月号に「パレスチナ抵抗詩抄」を特集し、七人の詩人たちの作品を土井大助訳で紹介した。その中にはダルウィーシュの作品「挑戦」「アル・アシーファの約束」の二篇がふくまれている。また81年～83年には小冊子ながら土井大助訳『パレスチナ抵抗詩集・全三冊』（アラブ連盟駐日代表部）も刊行された¹。

ダルウィーシュの作品の翻訳や紹介が七十年代から土井大助によって開始され、アラブ連盟駐日代表部から詩集が出版されていることも書き記されている。この後に82年にバイルートでパレスチナ難民への大虐殺があった際、「パレスチナ難民虐殺を糾弾する」声明が『詩人会議』に掲載されていること、ダルウィーシュの略歴紹介がある。続いて、サイドが『文化と抵抗』の中でパレスチナでは「芸術的卓越性と政治的主题は、いつも対立した関係にあるわけではない」と書いていることを引用しつつ、『詩人会議』創刊号で壺井繁治が「政治的であることは同時に文学的であること」と語っていることに言及し、パレスチナ詩人の心が日本人の心に響くのは、日本の社会状況が劣悪になりつつあるからだと結んでいる。壺井は戦前共産党員でプロレタリアート詩人ととらえられていたが、第二次世界大戦が始まると、戦争に協力する作品を発表し、戦後は再び共産党系の詩人として活動を再開し、その転向ぶりを批判する者もいた。ここではその是非に言及することは避けるが、戦前にたどることができる共産党系の詩人と、戦後活動を開始した左派系の詩人との分岐点をこのような地点に見いだすことができる。日本共産党と関係の

あった詩人土井大助にダルウィーシュの初期の作品は見いだされ、評価されている。問題を複雑にするのは、当時ダルウィーシュはイスラエル共産党に属していたのだが、後離党し、PLOに参加、オスロ合意の際には、この合意を進めたPLOを批判し、そこも離れ、まさに文学と政治、あるいは政党との緊張関係を身を以て体験してきた。その結果、政治と文学の関係が切り離されている詩人では理解できない場所にまで、移動を強いられることとなった。この点でもエグザイルを強いられた詩人と言わざるを得ない。

ダルウィーシュの翻訳者として土井大助が存在することを手がかりに、日本のジャーナリズムに彼がどのように登場したのかを探してみると、アジア・アフリカ作家会議という言葉に出くわした。廃刊となった『朝日ジャーナル』の1970年9月13日号の「文化ジャーナル」欄で、アジア・アフリカ作家会議が第三世界のノーベル賞とも呼ばれているロータス賞を六人の文学者に与えたことが報じられていた²。その一人がダルウィーシュであり、これがダルウィーシュの日本への紹介の始まりであった。アジア・アフリカ作家会議は第二次世界大戦後植民地支配から脱したアジアやアフリカ諸国の文学者の連帯を図るために設立された。文化大革命時期にソ連と中国共産党の対立もあり、中国はこの会議から後に離脱することになる。ロータス賞が誕生したのは1969年からだ。それに遡り、第一回の大会は1958年にタシケントで開催。日本からは、伊藤整、野間宏、加藤周一、遠藤周作らが参加している。1959年には常設のアジア・アフリカ作家会議日本評議会が発足し、事務局長には堀田善衛が就任した。中国がこの会議から離脱すると中国支持のメンバーは一方的に日本評議会の解散を表明するも、それを批判する声明を出すメンバーもいた。その後は新日本文学会に属する文学者たちが中心に活動し、1973年に野間宏の『青年の環』に対して、1979年には堀田善衛の『ゴヤ』に、1988年には小田実の『HIROSHIMA』にロータス賞が贈られている。「文化ジャーナル」の記事の中ではダルウィーシュに関して、故郷西ガリラヤの村落が破壊された時「ガザの少女」という詩でパレスチナ難民を慰めたこと、66年以來しばしば投獄されてきたこと、『パレスチナの恋人』という詩集を出版した事実が述べられ、アラブの抵抗詩人として高い評価を得ており、技法の面でも実験を恐れぬ詩人のようだと評されている。しかし、ガリラヤとガザの位置関係、イスラエルのパレスチナ人が置かれている状況などについては、特に述べられてはいない。

翌年『朝日ジャーナル』7月26日号の「文化ジャーナル」欄に再びダルウィーシュの名前が登場する³。上で述べたロータス賞の受賞式が70年の11月にインドのニューデリーで開かれた第四回大会で催されたことを伝えている。ベトナム人の詩人ト・ホアイの「ベトナムの美しい山河は統一されるだろう」というスピーチと並んで、ダルウィーシュのスピーチ、「パレスチナではもっとも美しい作品は牢獄で書かれている。詩は人民の声である。われわれは道を開いて生きねばならない」という情熱的なスピーチが感動をよんだと書かれている。第四回大会には、堀田善衛、大江健三郎、島尾敏雄たちが出席している。大江は後にサイドには強い影響を受けているが、この大会でのダルウィーシュへの言及はないのではないだろうか。第一回大会に出席した野間宏はその後同時代のアラブ文学に関心を持ち、『現代アラブ文学選』（1974）の編著者となっ

ている。ロータス賞の報道などからアラブ文学に関心を持ち、この図書の編纂を開始したことに間違いはないだろう。この文学選にはダルウィーシュの「パレスチナの恋人」が、彼の顔写真とともにアラブ文学者の池田修の翻訳で掲載されている。これはパレスチナの大地を恋人に見立てて、その思いを語るものであり、語り手はローマ時代からの時の流れの中に自分を置き、自らを騎士に見立て、戦いの意思を示している。紀元前から続く長い時の流れを意識して書かれた作品であり、パレスチナから遠く離れた日本の読者が感じる以上の戦慄をパレスチナ人の読者がこの詩に感じるのは間違いなさそうだ。

六十年代から七十年代にかけての日本は、池田隼人総理が唱えた所得倍増計画が成功し、七十年安保を乗り切ることでアメリカとの友好関係も土台作りが最終版へと入った時期だった。しかし、一方では公害問題やベトナム戦争にどのような態度を取るのかという問題も起きていた。自民党政治が押し進める政策に対し、それに歯止めをかけ、見落とされているものに目を向けようとする立場の文化人、作家やジャーナリストたちはここまで書いてきたような問題に意識的なものたちであった。アメリカやヨーロッパといった先進国ではなく、アジアやアラブの国と連帯することは、体制がよしとする価値観と拮抗するだけの力を持つことを目指していた。文学や文化が政治と拮抗する力を持ち得ると信じられる幸福な時代であったとも言える。すべてには時があるというように、一瞬であったとはしても、ダルウィーシュらのアラブ系作家を日本に受容しようとした点で幸運に恵まれたとも言えるべきだろう。きっかけは、ロータス賞を彼が受賞したこと、そして野間のような作家がその存在に目を留め、日本に紹介したことにある。

1974年7月26日号『朝日ジャーナル』の「文化ジャーナル」には、「成功した人民と人民の連帯：日本・アラブ文化連帯会議終わる」と書かれている。この会議は6月26日に始まり、27と28日には東京で「文学は何をしようのか」と題されたシンポジウム開催、28日夜には九段会館で大衆集会、29日夜は大阪中之島公会堂で大衆集会、30日夜は「民族解放闘争と反差別闘争」のシンポジウム、7月4日の九州大学記念講堂での大衆集会。これまで述べてきた日本とアジアやアラブの作家とのつながりがこの連帯会議に結実したと言っていい。日本人作家がこの時代アジアやアラブの文学にも目を配り、つながりを持つようとしたことを我々は誇りに思っている。「文化ジャーナル」によれば、「金も力もないごく少数の作家でも、やろうと思えばこの程度の国際交流が自力のできるのだ、という実績を作った点では、この成功は画期的とさえいい⁴」と書かれてある。その理由として、ダルウィーシュの「われわれは自由への権利以外のものは要求していないのだ」という言葉を引用し、「国家や民族をも越えた人間の自由、人間の全的解放への希求が、参加者に共有されていたからだろう」としている。残念な事件として、東京での大衆集会で「サダト政策粉碎」と英語で書かれた横断幕が会場に掲げられるのを見て、エジプトのサダト政権の文化大臣を務めていた作家でもあるユーセフ・セバイと他のエジプトの作家たちが退場し、集会が流会になりかねなかったことも報告されている。イスラエル国家を容認する立場を取りつつあったサダト政権にとっては、パレスチナの作家と連帯することへの政治的な配慮があったと予測できる。「文化ジャーナル」では、「彼は作家よりも大臣の方を選んだ」と断定して

いる。最後の締めくくりで、レバノンの詩人アドニスが東京大学での集まりで当時のアラブ諸国の政府はすべて反動的と語り、「その爽快な顔は忘れられることができない」と書かれている。ダルウィーシュと双璧をなすアラブの知識人・詩人アドニスが日本を訪れていたことを記憶にとどめておいてほしい。

このイベントに関して、『朝日ジャーナル』よりも先に『朝日新聞』の「文化」欄で紹介が行われていた⁵。東京、駿河台の山ノ上ホテルで挨拶する野間宏の写真つきで、見出しには「文学は何をなするか、自由へ切実な訴え、鋭く西欧的価値を批判」などと書かれている。これは27日に行われた「日本アラブ連帯会議」主催のシンポジウムの報告であり、その後大阪や福岡で行われたものについては言及されていない。後で触れるが開催地により主催団体が異なっている。出席者を確認するとエジプトからは文化相のユーセフ・セバイと他一名、パレスチナからはダルウィーシュ、レバノンからはアドニス、アルジェリアから一名、以上五名。日本側の出席者は、野間、堀田善衛、大江健三郎、小田実、加藤周一、針生一郎他数名。在日朝鮮人作家として、李恢成、高史明の二名。シンポジウムのポイントは三つあり、一つは日本とアラブの作家の相互理解を開始すること、二つ目は西欧的なライフスタイルではなく、本来それぞれが持っていた価値や生き方を見直すこと、三つ目はパレスチナ人がおかれた状況と在日朝鮮人のそれとの類似性を確認すること。特に二点目については、和魂洋才を取り上げ、アラブでも同じように西欧のテクノロジーを利用して進歩しようとしたが幻影に終わったとアルジェリアの詩人が語っている。ダルウィーシュはパレスチナ人の苦悩と希望を語り、アドニスは純文学的な視点からアラブ文学の伝統と革新を述べたそう。日本とアラブの作家が相互理解する上での多様な視点が提起されたと言うべきだろう。まとめとして、作家のいいだももが「これまでわが国がアラブに関心がなかったことの中にこそ、近代日本文化の構造があらわれている」と語り、欧米中心の国際交流の問題点を指摘している。エジプトの作家ハッラートが「これまで西欧文明によってイメージづけられてきたアラブと日本がそれ自身の見方をめぐいさり、その空間を互いに埋めあう対話をすすめること」の必要性を説き、文化相のセバイは現代日本文学をアラビア語に翻訳し、語学教育に力を入れたいと述べている。この段階では、エジプトの作家たちもこのイベントから離脱してはいなかったようだ。記事によれば、シンポジウムの後で開かれた東京での大衆集会で、「一部グループの妨害でアラブ側文学者総退場という事態になったことは大変残念な幕切れだった」と記されている。

記事の最後では李恢成の言葉を引用し、在日朝鮮人問題がパレスチナの問題とも対比されている。大韓民国政権を批判する内容の作品を発表し、反共法違反容疑のため刑務所で取調中であった詩人の金芝河に、自宅軟禁を強いられ、刑務所にもたびたび取監されたダルウィーシュの姿が重ねあわされた。言葉が持つ社会的な力、詩人が社会に対して果たすべき責任、詩人が使う言葉とはどのようなものかに関し、李は日本語を表現の手段として使うことで、日本人の文学的な営みを共有し、日本語を作り出すことで支配のイメージから逃れることが可能になり、「在日朝鮮人文学者の言語とは、明日をどう作るかの言語である」と述べている。在日朝鮮人と日本語の関

係は、イスラエルに住むパレスチナ人とそこで日常的に使われるヘブライ語の関係と類似した意味を持っている。

その後の行動をボイコットしたエジプトの作家たち以外は、大阪と九州に移動し、スケジュールをこなしている。東京での活動以外入手できる資料は限られているのだが、ダルウィーシュの逝去を知り詩人の直原弘道氏がネット上に彼らの日本での足取りを書き記し、三枚の画像をアップしている。二枚は中東からの作家たちを写した集会でのスナップ写真で、その内一枚にはダルウィーシュが写っている。もう一枚は奈良の公園で傘をさして、微笑んで鹿を見つめるダルウィーシュのアップで、バックには番傘を差して微笑む女性の姿があり、この一瞬をいっそう和やかなものにしてている。パレスチナからの賓客には鹿は珍しく写ったのだろう。関西での足取りは、6月29日に中之島公会堂で連帯集会、30日は解放センターでシンポジウム、7月1日は奈良へ、部落、東大寺、法華堂と記録されている。翌日は京都、修学院、部落、京都ホテル。そこから飛んで、12日はAAL連帯総括会議と書かれているが、どこで開催されたのかは表記されていない。詳細な報告書が作られたことと、日本側実行部隊の主力部隊は部落解放同盟であったと書き記されている⁶。東京でのイベントを終え、一行は関西へ、そして九州に移動するのだが、先に述べたように各地域でもてなす母体はバトンタッチしている。東京ではアジア・アフリカ連帯の関係者が仕切り、関西では部落解放同盟がその任をまかされていたようだ。7月3日の東京新聞朝刊には、来日中のアラブ代表団は2日、「京都で『差別と抑圧に反対して戦っているもの同士として、今後、交流と連帯を固く結ぶ』との文化交流協定を、部落解放同盟との間で結んだことを明らかにした」との記事がある。さらに直原氏はダルウィーシュが亡くなってから書かれた追悼の詩や追悼文を読み、この間の経過をまとめている。

数十年前の記憶をたどりつつ、ダルウィーシュが日本語の中にどのように刻み込まれているのかを直原氏は確かめているように思われた。最初に引用しているのは、デイヴィッド・クリーガーという詩人が書いた「偉大な詩人が死んだことさえ知る者は少ない」という作品⁷。「詩人は愛と素朴な言葉で語った / その地のために悲しんだ / とても乱暴に奪われた土地 / 詩人と詩人の民から」という詩行を引用し、ダルウィーシュの略歴を簡単に紹介している。それに続いて、詩人で英米詩の研究者、石原武氏が『詩と道化』の中の「詩と体制」でこの詩人の死について取り上げていることを記している。ダルウィーシュがアラブを代表する詩人であり、故郷を失い流転し、PLOで中心的な役割を果たしたこと、しかし、イスラム過激派のハマスの台頭に絶望し、政治を離れたと述べている⁸。これは正確に言うなら、オスロ合意を決断したPLOの方針と袂を分かったためとするべきことを指摘しておく。最後に直原氏が来日中のダルウィーシュの姿を描いた「パレスチナからやってきた」の最後の節が引用されている。この詩は三部からなる散文詩で最初の節はダルウィーシュの視点から書かれている。日本に来て「じぶんたちの国を想うとはげしい疲れのようなもの」に語り手は襲われている。二節目では射殺されて葬る者もなく横たわる驢馬の白骨、父祖の地を知らない少年たちなどなどの乾きが、「きみが差しているあざやかな黄色の傘の下にすべてよりそってくる」となり、語り手はダルウィーシュから直原に変わって

る。上述した鹿にえさを与える詩人の姿と重なりあうのだ。この日ダルウィーシュが差した傘は黄色だった。そして三節目の最後でパレスチナからやってきた詩人の名前が言挙げされる。

日に灼かれる国の六月から熱い咽喉と燃える歌をたずさえてやってきた男 日本の古都の異教の寺院のなかで雨に濡れながら 鹿とたわむれているマフムード・ダルウィーシュ⁹

この場面が奈良であることは明らかだ。一行は昔ながらの時の流れの中にいる鹿たちのいる興福寺、国立博物館や東大寺の庭にまで足をのぼしたのだろう。詩集の目次にはこの詩の書かれた年は1974年と示されている。大衆集会やシンポジウムでダルウィーシュが発言する姿とバランスをとるように、鹿とたわむれるその穏やかさや平安さを直原氏は描き残してくれた。この作品には他のアラブ系文学者やジャーナリストの名前は残っていない。ネットのブログの最後では「その白哲の智的な表情と微笑は今も心に焼き付いている」と直原氏はダルウィーシュの印象についてのみ書いている。

この後一行は九州での集会に向かった。その途中広島で途中下車し、平和記念公園と資料館に立ち寄った。ダルウィーシュは『忘れやすさのための記憶』*Memory for Forgetfulness* (1995)で、1982年にイスラエル軍がレバノンに居を構えていたPLOを追い出すために、レバノンの民兵を不当に組織し行ったレバノン侵攻、そしてレバノンの首都ベイルートへのイスラエル空軍による空爆の様子を描いている。ダルウィーシュはこの時レバノンに住み、この攻撃のさなかにはいた。空爆の凄まじさを示すため、原爆が投下された広島を枠組みとして使っている。この年の6月6日にイスラエル軍がレバノン国境を越えたことでレバノン侵攻は始まり、レバノン南部にあったPLOの拠点攻撃し、駆逐したことで第一幕を終えた。イスラエル軍はさらにPLOを追いつめるため、空爆を開始すると同時に、ベイルートを目指して北上を開始した。国連の安全保障会議は8月9日にイスラエルを非難する決議案を採択するも、8月18日にイスラエルとレバノン政府が最終調停案に同意し、戦いは終結することとなった。しかし、終結後もイスラエル軍はPLOの残党を狩り出すことを建前として、パレスチナ難民キャンプのあったサブラ・シャティーラという村で大虐殺を行い、国際的な非難を浴びてきた。ダルウィーシュが描いているのは、ベイルートへの空爆が始まった8月6日からの数日間。この日が広島の原爆記念日であることはダルウィーシュが知っていたのは、彼が広島を訪問し、そこで原爆の衝撃を感じたからに他ならない。『忘れやすさのための記憶』の一節を引用する。

広島は原爆の日、まさにその日に僕たちの肉体に真空爆弾を炸裂させた。その試みは成功した。

広島について覚えていることは、アメリカ人がその名前を忘れさせようとしたこと。私は広島を覚えている。九年前そこにいたのだ。ある街角で、広島はその記憶を語ってくれた。かつての広島がそこに存在したことを誰がこれから広島に思い出させてくれるだろうか。日本人の

通訳が、映画の『ヒロシマ・モナムール』を見たことがあるか私に聞いた。「愛のためでも戯れでも、ソドム出身の女性を愛せますよ」と答えた。「その人のボディガードがどこかの窓から私をねらって殺すとしても、その人を愛します。」「どういうことですか」と通訳の女性は質問した。「いわゆる詩的な表現です」と私。「でも、広島はどこにあるんですか。」女性は答えた、「ここが広島です。」「私には分かりませんね。」「なぜその名前を花で覆い隠すのですか。アメリカ人のパイロットが後で大声で泣いたからですか。彼はボタンを押して、見えたものは雲だけでした。でも後になって写真を見て、大声で泣いたのです。」「人生ってそんなものでしょ。」「しかし、アメリカという国は泣いたりしませんでした。自分に腹も立てませんでした。アメリカが腹を立てたのは、力のバランスに対してでした。」

広島の日。広島は明日だ。

記念館には殺した者の名前を示すものは何も無かった。「太平洋の基地から、この方向に爆撃機はやってきた。」これは共謀なのか追従なのだろうか。犠牲者に関しては、名前など必要ない。葉っぱがついていない人の骸骨。形のためにだけ、骨から作られた枝。形のためだけにある形。向こうにいる女性から選り分けられたわずかな髪の毛の束。壁の説明書きが死の程度を示している、火傷のため、煙のため、毒のため、放射能のため¹⁰。

ダルウィーシュの記憶に強く広島への思いが刻み込まれたことは疑う余地がない。通訳の女性との会話や原爆記念館で出会った遺物への思いは虚構ではないのだろう。原爆を使用したアメリカに対する日本人の鷹揚さが信じられないものであった理由は、この作品をレバノンで書いている真最中に、ダルウィーシュを含めたパレスチナ難民が第二次大戦で日本が被ったのと同じ絨毯爆撃を受けていたことに求められるのだろう。日本人にとって広島は過去の忘れがたき思い出であり、ダルウィーシュにとってはレバノンでの空爆は進行中の事件であり、その意味が忘れられないよう、書き残したのに違いない。

広島での動向を示す記事が7月4日の『中国新聞』に残されている。『原爆の惨禍は全人類の心に：アラブの作家ら広島訪問』と題され、爆心地のミニチュアを見学する写真付きで、二段抜きで五十行程度の短い記事だ。記事によれば広島を訪れたのは、ダルウィーシュとアルジェリアの作家とシリアの映画監督の三名。日本からは、針生一郎、栗原幸男、他に広島作家や詩人、原爆ドーム、資料館、記念館を訪れた後、中国新聞社に立ち寄り、広島印象を語り合ったとのこと。資料館に展示されていた焼け朽ちた衣類や廃墟の全景写真を見て、三人は嘆声をあげたり、急に沈黙したそうだ。三十三歳で初めて広島を訪れたダルウィーシュのコメントが引用されている。

ヒロシマの問題は全世界の人々の心の奥深く突き刺さったままだ。この残虐の代価を負ったのはヒロシマの人々だが、それは全人類が負った代価だと言える¹¹。

この言葉を激しい口調で語ったと言う。この時にはまだ、九年後レバノンで自分たちが被る運命など分かるはずも無かったろう。しかし、振り返って考えるなら、この時日本に来てダルウィーシュが広島を訪問したことは定められた運命であり、レバノン空爆の予兆でもあったと言ってみたくなる。広島を訪問したことが、後に『忘れやすさのための記憶』を執筆する上で、不可欠の要素となったことは言うまでもない。そして空爆という悲劇は今も継続し、命を失う大人や子どもがいる事実を忘却すべきではない。記事の最後は、4日と5日に福岡市での集会に参加した後離日すると締めくくられている。

福岡での活動に関しても『西日本新聞』に記録が残されている。見出しは「アラブ作家来福：九大で文化連帯集会」であり、内容は4日午後四時から九州大学記念講堂で「日本アラブ文化連帯集会」が開かれたこと。アラブからの出席者は、ヒロシマを訪れた三名、日本からは野間宏、針生一郎、文芸評論家の栗原幸夫、地元の市民運動家、前田俊彦らが講演を行ったそうだ。講演に先立っては、1966年に作成された『アルジェの戦い』の上映も行われている¹²。集会の内容が淡々と説明されているだけで、参加者のコメントや写真なども無い。1968年に竣工したこの建築物の大講堂には二千人が収容可能とのことだが、どの程度の人が集まったのか知るすべは無い。

70年にダルウィーシュにロータス賞が授与されたことから始まり、日本とアラブの文学者や作家の交流の機運は高まり、ついには74年の日本アラブ文化連帯集会へと一つのうねりが生じていた。時間的には福岡の集会の記事が最終部となる。どのような思いを抱いてアラブの作家たちが日本を離れたかは想像するしか無い。しかし、ダルウィーシュに関しては広島での体験とその記憶が、『忘れやすさのための記憶』の中で我々の記憶に刻み込まれることになった。それも第三者として広島での惨禍を追悼するのではなく、広島と同じ惨禍をレバノンで体験している当事者としての立場からのものだ。一方日本人の側から中東とその文化、パレスチナの惨状に関心を持つ気運が高まっていたことも忘れるべきではない。その一因はオイルショック石油危機にあったのだろう。70年代にはOPECの中東諸国が世界経済の中で果たす役割が脚光を浴びる一方、パレスチナ解放機構（PLO）から分派したパレスチナ解放戦線（PFLP）などの武力闘争による飛行機のハイジャックやミュンヘンオリンピックでの人質事件、それに付随する形での日本赤軍によるテルアビブ空港銃乱射事件などが起こり、パレスチナという危険な存在というイメージが一般的になっていった。ダルウィーシュは1973年にPLOに参加、その後アラファート議長のスピーチライターを努めるようになるのだが、作家としての仕事を土井大助たちが紹介するのを除き、その後彼の政治的な活動をマスコミが取り上げることは無くなっている。パレスチナの置かれた状況からして、ダルウィーシュも政治における自分の役割を放棄など出来なかった。パレスチナの政治問題に関わるダルウィーシュの扱いについても、マスコミは注意深くなったのだろう。彼の名前は来日以降忘れられたに等しかったが、その後『オリエンタリズム』の刊行でマスコミの脚光を浴びるようになったエドワード・サイードの著作の中でその名前が引用され、ダルウィーシュの痕跡はおぼろげな光を放つようになった。最後にマスコミの脚光を浴びたのは、

2008年に心臓手術後アメリカで亡くなったときであり、日本の新聞各紙も、アメリカのマスコミも大々的にその死を追悼する報道を行った。また、遺骸がパレスチナの西岸、ラーマラーに返ると、時のPLO議長アッバースは、国葬とすることを宣言している。パレスチナの人たちには国民的な詩人であり、パレスチナ以外の国の読者にとっても、ダルウィーシュの作品は普遍的な価値を持つものだったのだ。日本とは異なり、政治的な問題は抜きにして、アメリカではその作品の翻訳が数多く行われてきていることが彼の詩人としての卓越さを示している。

一般的に文学者は歴史的に評価の定まっていないテーマを扱うことを避ける傾向がある。文学はそれが書かれた瞬間において事件でもあるのだが、後の世代が振り返って眺めると、博物館の遺物にしか見えなくなることが多い。しかし、ダルウィーシュの作家としての活動が示すように、誰もが所与の時代の政治や文化のうねりの中で生きている。広島の名は彼の『忘れやすさのための記憶』の中にも、残ることとなった。ダルウィーシュだけでなく、当時の日本の作家たちも文学上のテーマを自分たちが時代を生きる上で避けることができないテーマとして受け止め、その責任を果たそうとしていた。その姿が忘れられることのないよう後の世代に伝えることはダルウィーシュの仕事に寄り添うものと成るだろう。

注

- 1 『詩人会議』, 2009.2, p. 55.
- 2 『朝日ジャーナル』, 1970.9.13, p. 59.
- 3 『朝日ジャーナル』, 1971.1.1～8, p. 143.
- 4 『朝日ジャーナル』, 1974.7.26, p. 66.
- 5 『朝日新聞』, 1974.7.1 (夕刊)
- 6 http://homepage3.nifty.com/zikihara/2_1.htm. 2015/05/05. 詳細な報告書に関しては、昭和51年に潮新書から発行された『第三世界と現代文明』だと思われる。
- 7 水崎野里子, 『現代世界アジア詩集』, 土曜美術社出版販売, 2010, pp. 138-9.
- 8 石原武, 『詩と道化』, 書肆青樹社, 2010, pp. 32-3.
- 9 直原弘道, 『霧がはれる』, 日東館出版, 1981, p. 25.
- 10 Mahmoud Darwish, *Memory for Forgetfulness*, University of California Press, 1995, pp. 84-5.
- 11 『中国新聞』, 1974.7.4.
- 12 『西日本新聞』, 1974.7.4. (夕刊)